

視察メンバーからのコメント返し

視察メンバーは、参加者に貼っていただいた付箋を読み上げて紹介しながら、それに対して自身が感じたことを述べていきました。

発言要旨

14:20～14:35 (15分)

視察メンバーからの コメント返し

- 視察メンバーが、フォトボイスの間に皆さまと話し合ったことや、貼っていただいた付箋を見て、どんなことを感じたか、どんな話が印象に残ったかをお話します。
- この後のグループトークの材料にしていれば、ありがたいです。

木村：それでは、我々視察メンバーが、いただいた意見なども紹介しながら、今回のフォトボイスでどんなことを思ったかということ返す「コメント返し」の時間を取りたいと思います。

どちらから行きましょうか？ はい、ではお願いします。

竹中：たくさん付箋をいただいたので、全部お話しできればいいのですが、時間もあるので、付箋が集まった部分をご紹介しますと思います。

1つ目はこの辺りです。町役場のOBの方の、「震災後、福島に視察に行ったところ、思ったより状況が悪くて衝撃を受けた。なかなかそういうことは表立って言えないけれども、原発をやってよかったのかなと思った人がいてもおかしくない。今は反対だとは言えないけれども、反対したいなと思っている人が町民や町の議員の中にもいるのではないか」というコメントに対して、皆さんから付箋をいただいています。例えば、「お金が絡んでくるとなかなか意見が言いにくくなる、というのは東海村でも同じです」というような付箋をいただいています。

もう 1 つ、私が面白いなと思ったのはこちらです。この辺りは町の様子を並べてみました。一番上が役場、真ん中が住宅、一番下が小学校と中学校の様子なのですが、「デザインに一貫性がない」と皆さんが指摘されていました。小学校・中学校が浮いていると。「町全体としてどういう方向に行きたいかということが、デザインから見えてこないのは良くないのではないか」というようなコメントが多くて、なるほどな、面白いな、と思いがら聞いていました。

私からは以上です。

木村：ありがとうございました。では次に、清宮さん。

清宮：私は、他の皆さんと比べると食べ物の写真を多く貼ったので、それに対するコメントもいただきました（笑）。

今の役場の写真に対して、付箋をたくさんいただいています。東海村で言うと、前の商工会がこういう雰囲気だったので、よく分かるのですけれども…。私たちが役場の前に通りかかったときに、役場に用事があったおじさんがちょうどやってきて、「あんたらは反原発の人たち？」と声をかけられました。これに対して、「外部から来る怪しい人＝反原発？」「外部からの意見は、地元の人には迷惑なのは分かるが」「原発問題をイデオロギーと捉える考え方はびこり」という付箋をいただいています。視察のときは、町中を歩いていて、あまり人通りがありませんでした。その中で、私たちが 5～6 人で集まって歩いて、カメラを構えてカシャカシャやっているの、いかにも怪しいのですけれども、外部から来た怪しい人たちイコール反原発の人たち、という意識が、どこかで町民の方たちの中にあるのだな、というのが印象に残っています。

あとは、「経済的な意見が誘致のときに優先されてしまったのではないか」「町の人の声がどれだけ届いていたのかが分からない」というような付箋もいただいています。

それから、避難計画を策定しなければいけないのはどこの自治体でもそうなのですが、大間町の地理条件は東海村とはまったく違います。切り立った道路を通らなければならないなど、東海村以上に避難は難しいのかなと感じています。それに対して、「真剣に考えているのか？」という付箋が貼られています、確かにそうだなと思います。

あとは大間牛ですね。海のマグロに対して、「陸（おか）マグロ」と呼んで、牛のブランド化にも取り組んでいるのですが、なかなかうまく浸透していないし、パンフレット等も大々的に力を入れているわけではない。自分たちで原発以外の産業（漁業や観光）を盛り立てていく、というよりは、原発が今後どうなるのか様子を見ているという面が強いのかなと思いました。

そんなところですよ。ありがとうございます。

木村：ありがとうございました。では、稲田さん。

稲田：私は役所の人間ですので、役所と住民の皆さんのコミュニケーションについて、それから、住民の皆さんがどう感じておられるのかについて、インフラや地域振興も含めて、お話を伺ってきました。

1つ目に、大間町役場が住民の方に対してどのような取り組みをしているのかを聞いてきました。事業者である電源開発さんは全戸訪問などをされているのですが、それとは別に、町役場は、原子力というのはこういうものである、というコミュニケーション活動をしてきたそうです。

特に、他の立地市町村に対する視察に力を入れたとお話しされていました。視察は、ここ10年ほどは年に5回ほど実施しているそうです。町の様子、原子力発電所の運転状況、検査状況、あるいは近年なら休止している状況等も含めて視察してきているというお話でした。参加者は公募で集めて、主婦の方、漁師さん、あるいは退職された方々などが参加されているそうです。そして、視察から帰ってきた方々が、ご自身が感じたことをご自身の言葉で周りの方に伝えていく。まさに今私たちがやっているような活動に力を入れてきた、というお話を伺いました。なお、この視察は広報交付金を活用して実施しているようです。

この取り組みは非常に有効だそうで、特に主婦の方々は独自のネットワークで周りの方にお話をされていくようです。「原子力発電所って、意外と普通に町中にあるものなんだ」「お金が入るから仕方ないけれども、やはり少し不安だ」というような意見があったそうです。ただ、大間町役場としては、様々な意見があるのは当然のことであって、今後も引き続き視察を続けていきたいと考えているそうです。

では、大間町では原子力に対する理解が昔からあったかという点、必ずしもそうではなかったようです。大間町は、いろいろなところでお話があったように、漁師の町です。大間町では、企業誘致がうまくいかなかったのが原子力発電所を誘致しようという動きが出てきて、誘致が始まったわけですが、当初は、漁師の方たちは、「原子力発電所ができれば、漁獲量が減ってしまうのではないか」という漠然とした不安を抱えておられたようです。その不安の声に対して、全国の立地市町村への視察の取り組みを始め、また、その中で全国の漁師さんとの意見交換を実施し、「原発が建設されても別に漁獲量は変わらなかった」というお話を聞き、少しずつ理解が進んでいった、という経緯をお聞きしました。また、大間町ではマグロ、イカ、コンブ等の漁獲量が徐々に減っていたことから、漁協の中でも「多面的な産業があってもいいのではないか」という声があがり、最終的に原子力発電所の建設までたどり着いた、というお話を聞いてきました。

一方、私は原子力防災を担当しているので、広域避難計画をはじめ、原子力防災はどうなっているのかも聞いてきました。

大間町としては、まず青森県が広域避難計画を策定し、その後、大間町や近隣町村でも計画を作っていきたいと考えているそうです。一方で、計画だけでなくインフラ整備、津波避難の対応や、耐震がまるで考えられていないような建物を今後どうしていくかというこ

とも考えていきたいと話されていました。この辺りについては、皆さんからも付箋をいただいているのですが、なかなか国や県が動いてくれないという悩みも抱えておられるようです。

そういった中で、お金の話や地域振興の話もありましたが、その辺は木村先生にお任せするとして、私からの発表は以上です。

木村：ありがとうございました。

私からは、この後のグループトークも踏まえて、いただいた付箋をいくつか紹介したいと思います。

一番気になるのは、やはりここですね。「安全に関してはおまかせする、という意識があるのではないか」「『安全にやる』で思考停止していないか」という付箋をいただいています。事業者側も住民側もそういう意識になってしまっている点が気になっています。

福島事故の直後、専門家は、「安全という言葉は使わないで、リスクという言葉を使うようにしよう」と方針転換したように見えてましたが、それからほぼ7年が経ち、また「安全」という言葉があちこちで使われるようになってきて、リスクという言葉はあまり使われなくなってきました。私は、「この程度のリスクがあります、それを皆さんはどのように思われますか」というコミュニケーションのプロセスがなければ、リスクを受け入れるという話にはならないと思っているのですが、最近は、事業者側は「安全を確保します」と宣言し、住民側は「ではお願いします、お任せします」と言うだけの、極めて単純な信頼の構図になってしまっているのではないかと危惧しています。一見するとすごくうまくいっているように見えてしまうこれらの言葉も、少し裏を返すとそういったほころびみたいなものが見えてきます。それをいかに捉えていくか、そして、どうすればよいかを考えていくか、というのは非常に難しいのですが、今後取り組んでいかなければならない課題だろうと考えています。これは、今回のワークショップを開催した狙いのひとつでもあります。

なるほど、痛い言葉だなと思ったのはこちらです。『『原子力との付き合い方』って、その前に付き合うか、付き合わないか、でしょう。付き合うことを前提にすることがおかしい』。まさにその通りだと思います。

これは私の個人的な考えですが、日本では、「原子力」の議論の範囲が非常に狭いと感じています。世界的には、「原子力」と言った際には核兵器と原子力発電の2つがあり、その中でどのように利用していくべきかが論じられています。日本では、核兵器に関する議論はほとんどなされておらず、「原子力発電の安全マネジメント」というような議論が多いです。しかし、本来は、人類は原子力というエネルギーを見つけてしまった。それは兵器にも使えるし、発電にも使えるもので、日本にもすでに持ち込まれている。それをいかにマネジメントしていくべきか、という議論をすべきだと思います。

「原子力利用」に限るならば、この付箋はまさにおっしゃる通りなのですが、「原子力」という科学技術はもう発見されてしまったので、人類としてどう付き合っていくべきかは

考えなければなりません。そういった広い意味も含めて、「私たちは原子力とどう付き合うか」というテーマで話し合っただけだと思っと思っています。

ということで、私からは、コメント返し半分、次のグループトークにつなげる話半分で、ご紹介させていただきました。